



# 新型コロナウイルス感染症の 感染経路と感染対策

片山 充哉<sup>1) 2)</sup>

IRYO Vol. 75 No. 1 (85-88) 2021

## 【キーワード】 新型コロナウイルス, 感染対策, 診断, 治療

2019年12月に武漢で発生した新型コロナウイルス感染症が瞬く間に世界に広がった。流行初期の国立病院機構東京医療センター（当院）の対応は、武漢からの邦人帰国者の受け入れ施設やダイヤモンドプリンセス号、新型コロナウイルス入院施設への人員派遣を中心に行っていた。当院は感染症医療機関ではなく、陰圧個室や重症者管理が行える個室が不足しているということもあり患者の受け入れを制限していたが、地域住民のニーズに応えるため、2つの病棟を新型コロナ病棟として対応するに至った。

2019年12月に武漢で報告された際に、ヒトからヒトへのいわゆる人-人感染はおこさないと報告されていたCOVID-19は、病原性や病態が徐々に解明され、飛沫感染により感染するウイルスと考えられている。また、エアロゾルを発生する処置としての気管内挿管や鼻咽頭からの検体採取の際には飛沫核感染予防も必要となるウイルスである。また、3月から4月の第1波の際に治療薬として推奨されていた抗マラリア剤のヒドロキシクロロキンなどが第2波になると、害にすらなりうる治療として報告されるようになり治療薬の方略も目まぐるしく変化した。

なぜ、このようなPandemicに至ったのか？ 新型コロナウイルスの封じ込めが難しい最大の特徴は、感染源としてのピークが発症前にあるということと軽症者が多いことであろう（図1）<sup>1)</sup>。無症候期にビジネス会議に参加し、複数の患者に感染が広がったという報告から<sup>2)</sup> 無症状の患者に感染性があることで、症状出現前の感染が全体の44%を占めているという報告もみられるようになり<sup>3)</sup> 中国とシンガポールでおきたクラスター分析により無症候患者が感染者全体の48-62%に感染させていると報告された<sup>4)</sup>。発症前に感染性のピークがあるということが、普段の生活の中で知らず知らずのうちに感染を広げてしまうことにつながるのだ。また、発症してからも軽症が多いため、すぐに受診に至らない。中国CDCの報告によると80%の患者は軽症者である<sup>5)</sup>。武漢からの報告では、医療機関を受診するまでに4.6から5.8日かかり入院するまでは9.1日から12.5日と報告されている<sup>6)</sup>。医療機関を受診してからPCR検査を施行され診断に至るまでにはさらに数日を要する。他国のデータということもあり受診状況や発生状況などの違いはあるものの単純計算をすると発症前のピークから発症して受診までのトータル6-7日間は多くの患者が感染性を有しながら感染

国立病院機構東京医療センター 1) 総合内科, 2) 感染症内科 †医師

著者連絡先：片山充哉 国立病院機構東京医療センター 総合内科 〒152-8902 東京都目黒区東が丘2-5-1

e-mail : mitsuya0111@gmail.com

(2020年11月4日受付, 2021年2月19日受理)

Transmission Route and Prevention of SARS-CoV-2 Infection

Mitsuya Katayama, NHO Tokyo Medical Center

(Received Nov. 4, 2020, Accepted Feb. 19, 2021)

Key Words : COVID-19, infection control, diagnosis, treatment